

うしお

第 98 号

昭和 39 年 7 月

目 次

昭和 39 年度ブリ仔採捕漁業 試験実施概要	漁 業 部	1
6 月のマグロ延縄漁況	"	11
一 般 漁 況 (6 月分)	"	13
定 置 観 測 (6 月分)	養 殖 部	14
漁場観測速報 (5、6 月分)	"	16
港のえんぐみ (2 話)	北 山 易 美	21
奄 美 短 信	大 島 分 場	24
各 部 の 動 き	編 集 部	26
分 場 の 動 き	大 島 分 場	28

鹿児島市城南町 20 番 12 号

鹿児島県水産試験場

昭和39年度ブリ仔採捕漁業試験実施概要

漁業部

1、目的

前年に引続き、県下ハマチ蓄養需要量の確保のため漁業試験に重点を置き、該漁業従事漁船の操業指導並びに漁場誘導等実施し併せて水産庁「モジヤコ採捕のブリ資源に及ぼす影響の研究委託調査実施要綱」に基づく基本調査を行い、該漁業の把握、漁具、漁法の究明について試験操業を実施した。

2、調査期間

自 昭和39年4月22日) 46日間
至 昭和39年6月6日
内操業稼動 37日

3、漁場

別図の通り、「鹿児島県沿岸一帯及び宮崎県南部」

4、調査船並びに稼動漁船及び乗組員

1、指導船	かもめ	14.6.5t	60馬力	10名
2、民間船	牛根漁協	1隻	}	各船4名～5名乗組
	海潟漁協	10隻		
	大崎漁協	1隻		

5、根拠地

指導船 かもめ……山川港(6月上旬内之浦港を4日間臨時基地とした)
民間船……牛根漁協船……山川港
海潟漁協船……海潟港を主とし山川港に3隻位仮設した。
大崎漁協船……志布志、内之浦港。

6、漁具

指導船 かもめ	抄網	1張	
	旋網	2統	
	浮子方		沈子方
		10.6m	7.8m
		4.5m	3.8.9m
民間漁船	各船共に小型旋網各1統		
	(浮子方 4.5～5.0m		沈子方 3.8～4.5m)

7、漁獲量

本年度本県蓄養予定尾数は286,000尾であつたが、水試、民間船にて

110,164尾で約38.5%の不成績に終わった。

指導船は目標10万尾に対し約31.1%の31,093尾であつた。

8. 経過概要

① 指導船「かもめ」の行動及び経過

本年は水試、民間漁船共に4月下旬より6月上旬まで調査操業を実施した。本県沿岸に於けるブリ仔の漁模様は大平洋側各県に比べ出現が少なかつた為低調であり、又民間船はもつばら鹿児島湾内の操業が多く、指導船のみが沿岸一帯を調査操業し、漁期後半には宮崎県沖合も入漁調査したが本県ブリ仔蓄養需要量の確保も出来ない不成績の裡に本試験を終了した。

② 流れ藻、ブリ仔の出現及び採捕

本年は鹿児島湾内を除く外全海域共に流れ藻の出現は少なく、又ブリ仔の出現と流れ藻の出現に多少のずれが見られたように思われる。

ブリ仔の出現は4月中旬に初まり5月中旬に盛漁期となつた。薩南、薩西海域では流れ藻は見てもブリ仔の出現なく、漁場は専ら大隅東海域、鹿児島湾内と東側漁場に限定された感である。これは大平洋側各県の漁況から見て黒潮流による何らかの影響ではなからうかと思考される。

次に旬別に両者の関係を見ると

◎ 4月下旬

基地設営後(25日)調査操業したが、大隅東部辺塚沖～観音崎沖にて小型流れ藻5ケで約3000尾(体長3～6cm)の漁獲を見たので好漁を期待したが途中機関故障のため探索出来ず漁期を逸した。

◎ 5月上旬

本旬の流れ藻は鹿児島湾内及び中ノ瀬附近に多く大隅東部では少なかつた。鹿児島湾内はブリ仔の付きも稍々良く民間船の操業も多く、1日に6000尾～500尾と好漁したので期待したが長く続かなかつた。中ノ瀬附近及び大隅東部はブリ仔の付き悪く0～100尾程度で全り出現を見なかつた。魚体長も全海域共に3～6cmであり小型魚が主体をなしていた。

◎ 5月中旬

串木野海湾特に中ノ瀬附近に、流れ藻(約30m²—5m²)多くあるもブリ仔を全く認めず。旬後半佐多岬南東3—10沖合の干潮時の潮目にて小型流れ藻やヨド等に稍々良いブリ仔の付を見た。体長も4～13cmと稍々中型そろいの群であり、盛漁期の出現を示したが時化の為に2日間にて終り又、漁場と思われる大隅東部の探索も出来ず不明のままに終わった。

(宮崎県沿岸は盛漁期)

◎ 5月下旬

鹿児島湾内及び湾口には流れ藻稍々多くあるもブリ仔を認めず。大隅東部は流れ藻あれば10—200尾程度(体長5—13cm)のブリ仔の付を見たが、流れ藻は少なく好漁の期待は出来ず、後半は数十尾程度的大型魚が見られ終漁期の様相を呈するに到つた。

◎ 6月上旬

大隅東部では流れ藻、ブリ仔共に全く認めなかつたので、宮崎県油津沖合まで調査したが、同海域も流れ藻少く又、魚体も大型化（体長8～16cm）し、10～100尾程度の漁獲で游泳水深も深くなり全く終漁期と思われたので本試験を打切つた。

※ 流れ藻とブリ仔の旬別出現状況は第1図、及び採捕魚の体長組成については第2図の通り。

◎ 海況について

本試験期間中は採捕に重点を置いたため、表面水温のみの測定にとどめたが、本県沿岸一帯の海洋観測を実施した照南丸の観測結果を別記漁場図に表面水温分布のみを記載した。表面水温は例年と余り大差はみられなかつた。又潮目は薩西海域では中ノ瀬附近に、大隅東海域では大泊より辺塚附近の沿岸域に多く認められた。前者は流れ藻は多く認めるもブリ仔少なく、後者は宮崎県方面の漁況からして或程度の迴游はあつたものと思われるが流れ藻が少なかつたため、ブリ仔の発見が出来なかつたものと思考する。

次に旬別表面水温とブリ仔、流れ藻の出現について簡単に下記する。

月、旬、別	漁場 №	表面水温範囲	ブリ仔出現体長範囲	流れ藻出現
4月下旬	鹿児島湾口 ②	19.0℃～21.5℃	2 — 6 cm	少し
	大隅東海域 ①	〃	〃	〃
5月上旬	鹿児島湾口、内 ②	19.6 ～ 21.8	2 — 6	少々多し
	大隅東海域 ①	20.4 ～ 22.2	〃	少し
	薩南海域 ③	21.8	〃	〃
	串木野海湾 ④	21.5 ～ 22.2	〃	多し
5月中旬	鹿児島湾口、内 ②	21.0 ～ 22.3	4 — 13	少し
	大隅東海域 ①	22.3	〃	〃
	薩南海域 ③	19.5 ～ 22.2	〃	〃
	串木野海湾 ④	19.5 ～ 22.2		多し
5月下旬	鹿児島湾口、内 ②	21.0 ～ 21.8	5 — 13	少々多し
	大隅東海域 ①	22.2 ～ 23.4	〃	少し
6月上旬	大隅東海域 ①	22.8 ～ 23.0		なし
	宮崎県 ⑤	23.0	8 — 16	少々多し

又、標識放流経過については第3図の通り。

◎ ブリ仔採捕について

前年まで使用した旋網は大型のため操業回数に制約を受け漁獲量に支障があつたので本年は小型旋網を1統作成し操業回数の増加による漁獲の増大を計つたがブリ仔の発見少なく漁獲不振に終つた。初漁期は抄網にて充分採捕できたが5月上旬後半以降は旋網操業が多くなつた。又5月下旬以降は魚体が大きくなり（8～16cm）群も小さく游泳層も深くなり大型旋網にても逸脱の度合が

多くなつた。一方民間船は初めての操業であつたに拘らず採捕裝備については何等不備な点は認められなかつたが、使用船は湾内を漁場とする八田網の付属船を転用したため外洋での操業に適せず精々鹿児島湾口迄の探索に終つたことも不漁要因の一つとも思われた。

次に月別旬別漁獲量について、第1.4.5.表及び漁獲量指数第2表、漁獲努力指数第3表に記した。

第1表 プリ仔旬別採捕量(県水試分)

月、旬、別	操業 日数	操業回数		採捕尾数	叉長、体重、範囲	
		抄網	旋網		叉長	体重
4月下旬	2	16	4	5.039尾	3—7cm	0.5—2.1g
5月上旬	9	52	27	2.209	2—5	
中旬	10	14	93	16.940	3.5—13.4	0.6—31.2
下旬	10		117	5.596	"	"
6月上旬	6		42	1.309	7—16.9	7—63.1
計	37	82	283	31.093	2—16.9	0.5—63.1

第2表 海区別、月別、漁獲量(指数)

月別	使用漁具	%					計
		1区	2区	3区	4区	宮	
4月	抄網	100	21.0				68.2
	旋網		79.0				31.8
	計	100	100				100%
5月	抄網	0.7	51.6	63.2	21.7		4.9
	旋網	99.3	48.4	36.8	78.3		95.1
	計	100	100	100	100		100%
6月	旋網					100	100
	計					100	100%
計	抄網	12.7	33.2	63.2	21.7		44.9
	旋網	87.3	66.8	36.8	78.3	100	85.1
	計	100	100	100	100	100	100%

第3表 漁獲努力指数(作業回数)

使用漁具	1区	2区	3区	4区	宮	計
抄網	24.4	32.9	3.7	39.0		100%
旋網	46.1	21.9	0.7	17.3	13.4	100
計	41.6	24.4	1.4	22.2	10.4	100

第4表 月、旬別及び漁場別採捕量

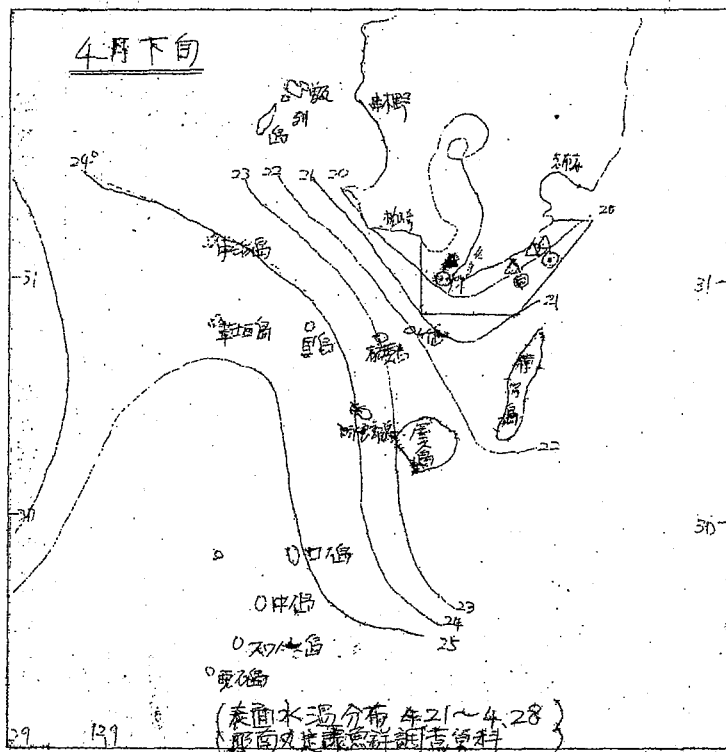
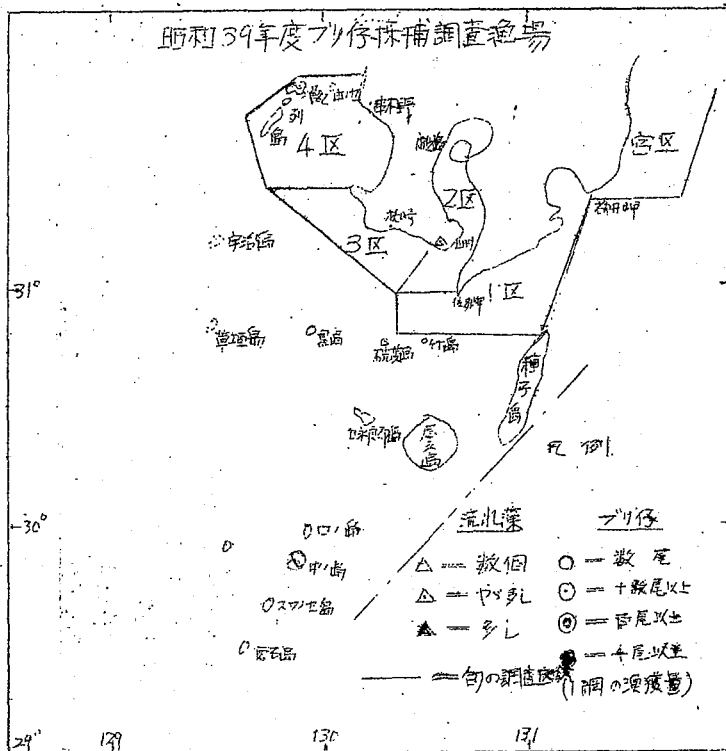
(鹿児島県水産試験場分)

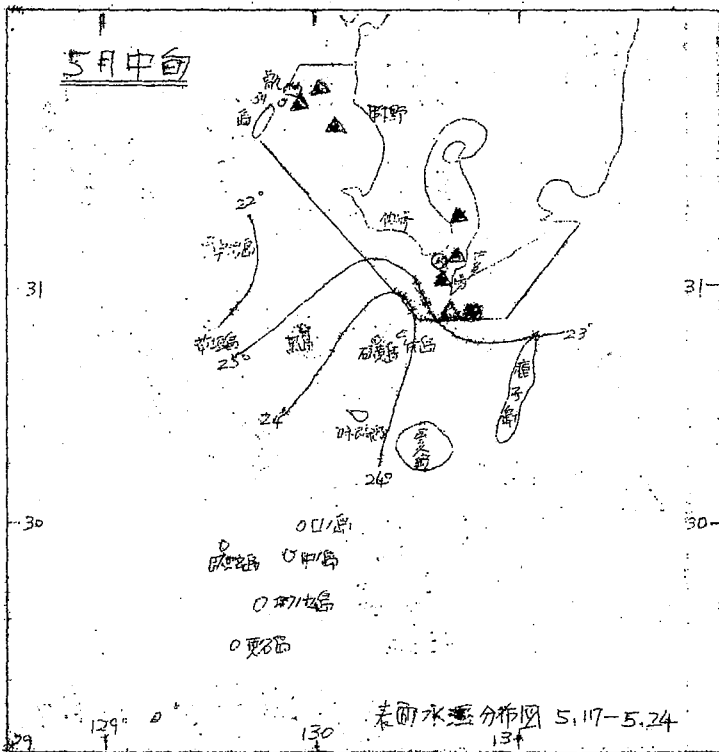
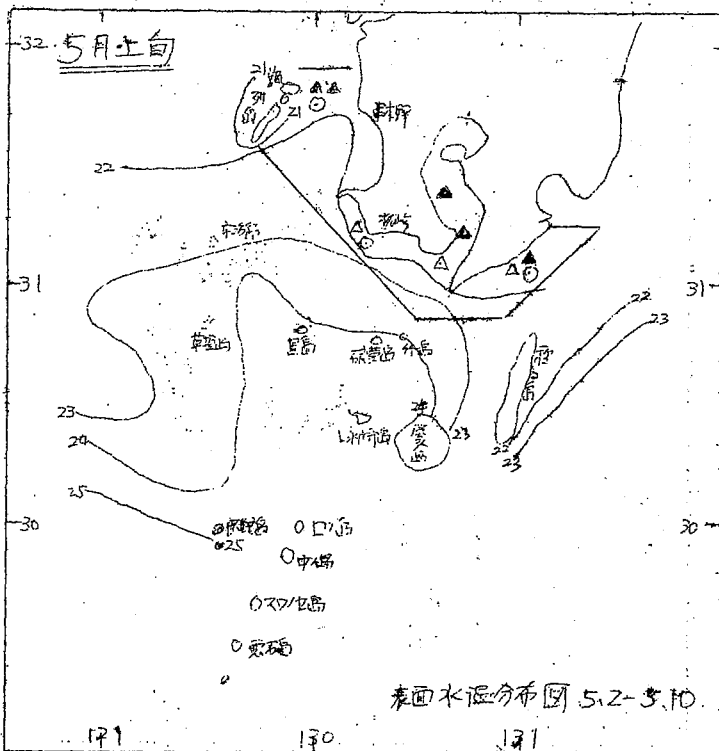
月、旬、別	使用漁具	1 区			2 区			3 区			4 区			宮			総 計		
		漁獲尾数	操業回数	平 均	漁獲尾数	操業回数	平 均	漁獲尾数	操業回数	平 均	漁獲尾数	操業回数	平 均	漁獲尾数	操業回数	平 均	漁獲尾数	操業回数	平 均
4 月下旬	抄 網	3,014	7	430.6	425	9	47.2										3,439	16	208.6
	旋 網				1,600	4	400.0										1,600	4	400.0
	計	3,014	7	430.6	2,025	13	155.7										5,039	20	251.9
4 月 計	抄 網	3,014	7	430.6	425	9	47.2										3,439	16	208.6
	旋 網				1,600	4	400.0										1,600	4	400.0
	計	3,014	7	430.6	2,025	13	155.7										5,039	20	251.9
5 月上旬	抄 網	155	12	13.0	694	17	40.8	55	3	18.3	193	20	9.6				1,097	52	21.1
	旋 網	753	6	125.5	0	4	0				359	17	21.1				1,112	27	41.2
	計	908	18	50.4	694	21	33.0	55	3	18.3	552	37	14.9				2,209	79	28.0
5 月中旬	抄 網	5	1	5.0	0	1	0				105	12	8.8				110	14	7.8
	旋 網	15,520	29	535.2	561	30	18.7	32	2	16.0	717	32	22.4				16,830	93	181.0
	計	15,525	30	517.2	561	31	18.1	32	2	16.0	822	44	19.3				16,940	107	159.3
5 月下旬	旋 網	5,507	93	59.2	89	24	3.7										5,596	117	47.8
	計	5,507	93	59.2	89	24	3.7										5,596	117	47.8
5 月 計	抄 網	160	13	12.3	694	18	38.5	55	3	18.3	298	32	9.3				1,207	66	18.3
	旋 網	21,780	128	170.1	650	58	11.2	32	2	16.0	1,076	49	22.0				23,538	237	99.2
	計	21,940	141	155.6	1,344	76	17.7	87	5	17.4	1,374	81	17.0				24,745	303	81.6
6 月上旬	旋 網	0	4	0										1,309	38	34.4	1,309	42	31.1
	計	0	4	0										1,309	38	34.4	1,309	42	31.1
6 月 計	旋 網	0	4	0										1,309	38	34.4	1,309	42	31.1
	計	0	4	0										1,309	38	34.4	1,309	42	31.1
総 計	抄 網	3,174	20	158.7	1,119	27	41.4	55	3	18.3	298	32	9.3				4,646	82	56.7
	旋 網	21,780	132	165.0	2,250	62	36.6	32	2	16.0	1,076	49	22.0	1,309	38	34.4	26,447	282	93.5
	計	24,954	152	164.1	3,369	89	37.8	87	5	17.4	1,374	81	17.0	1,309	38	34.4	31,093	365	83.2

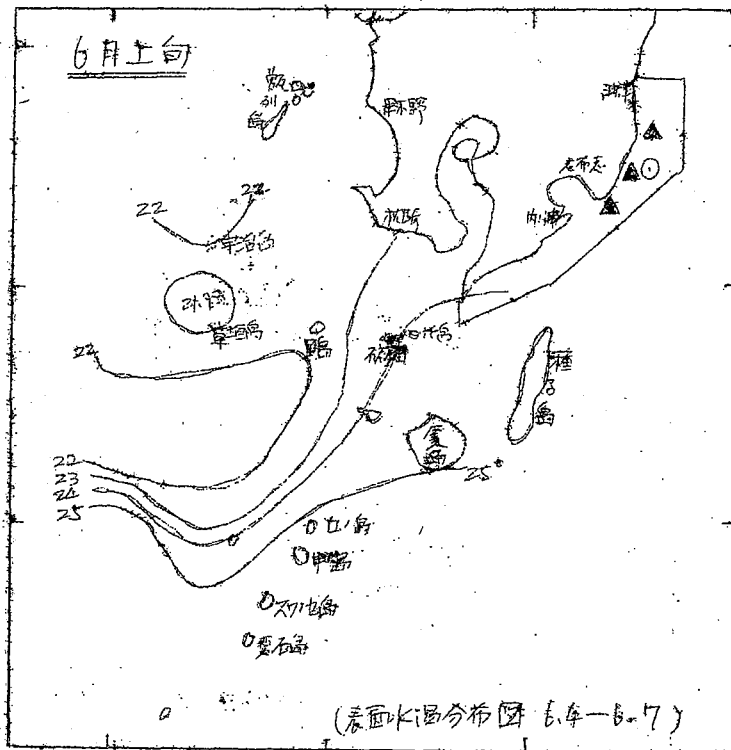
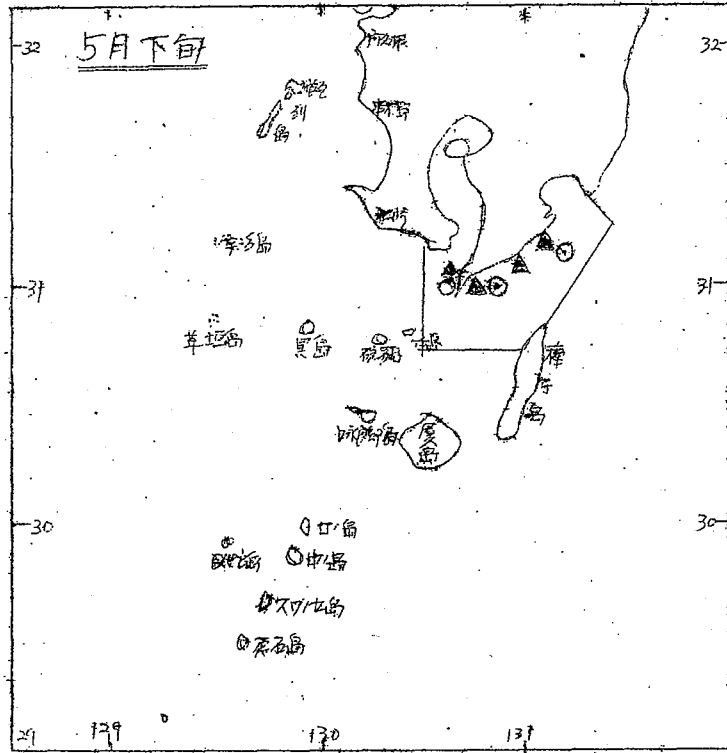
第5表 民間船月別、漁場別採捕量

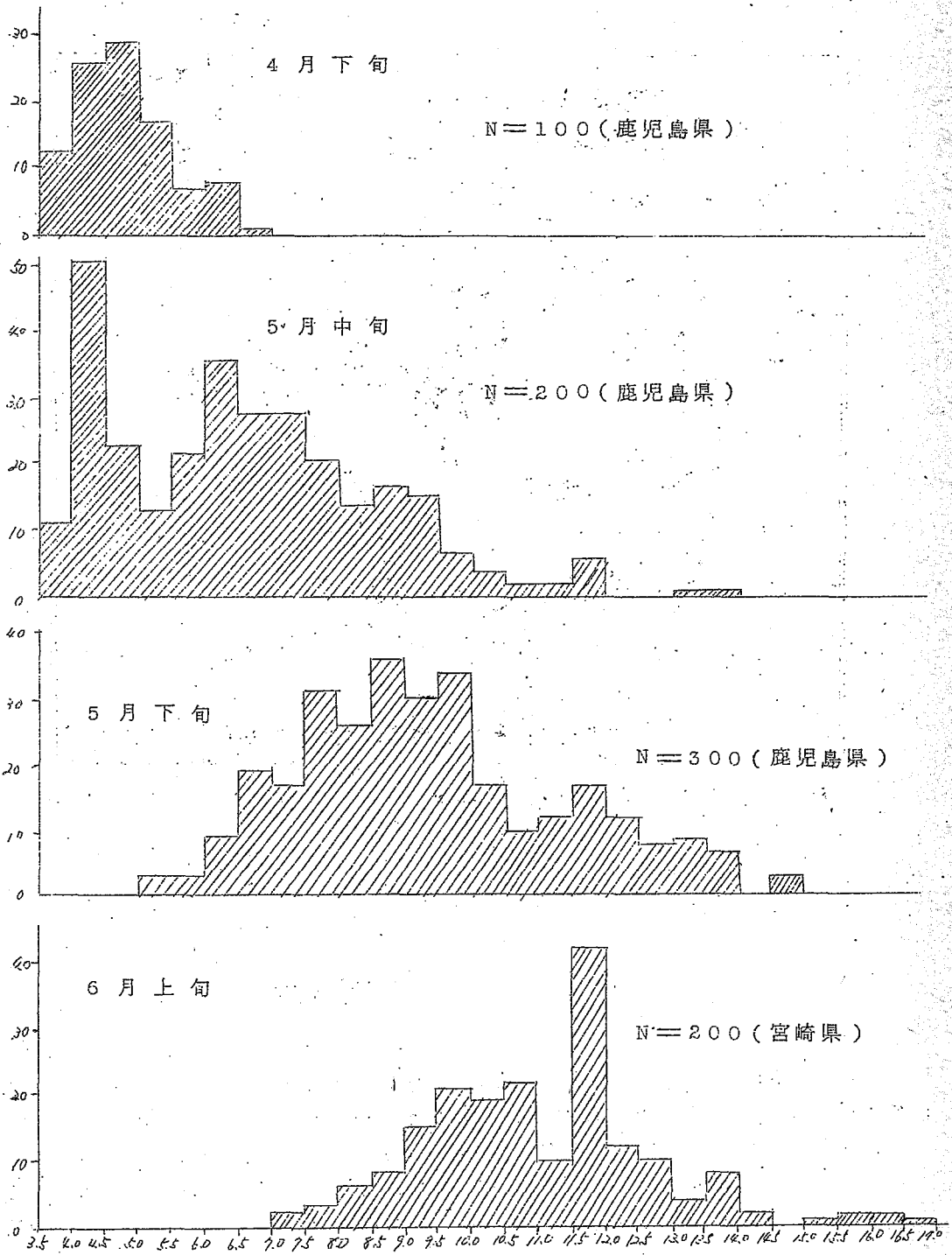
No. 摘要 トナ数	月 別									漁 場 別					
	4 月			5 月			計			1 区			2 区		
	操業日数	操業回数	漁獲尾数	操業日数	操業回数	漁獲尾数	操業日数	操業回数	漁獲尾数	操業日数	操業回数	漁獲尾数	操業日数	操業回数	漁獲尾数
1	3	53	2,600	8	210	4,170	11	263	6,770	1	10	200	10	253	6,570
2(1.625)	2		2,000	11		5,500	13		7,500				13		7,500
3(1.86")				14		2,300	14		2,300				14		2,300
4(2.10")				14		2,000	14		2,000				14		2,000
5(2.19")	7		1,000	10		1,700	17		2,700				17		2,700
6(2.32")	2		500	16		2,500	18		3,000				18		3,000
7(2.29")	2		1,200	5		4,800	7		6,000				7		6,000
8(2.21")	2		1,300	13		13,700	15		15,000				15		15,000
9(4.41")				5		2,000	5		2,000				5		2,000
10(4.97")				4		2,500	4		2,500				4		2,500
11(2.46")				5		1,300	5		1,300	1		250	4		1,050
12(2.46")				4		200	4		200				4		200
13(2.47")				11		1,201	11		1,201				11		1,201
14(1.116)	3		5,000	9		21,600	12		26,600	12		26,600			
計	21		13,600	129		65,471	150		79,071	14		27,050	136		52,021
牛根漁協船	3	53	2,600	8	210	4,170	11	263	6,770	1	10	200	10	253	6,570
海潟 "	15		6,000	112		39,701	127		45,701	1		250	126		45,451
大崎 "	3		5,000	9		21,600	12		26,600	12		26,600			

昭和39年度総漁獲尾数 110,164尾

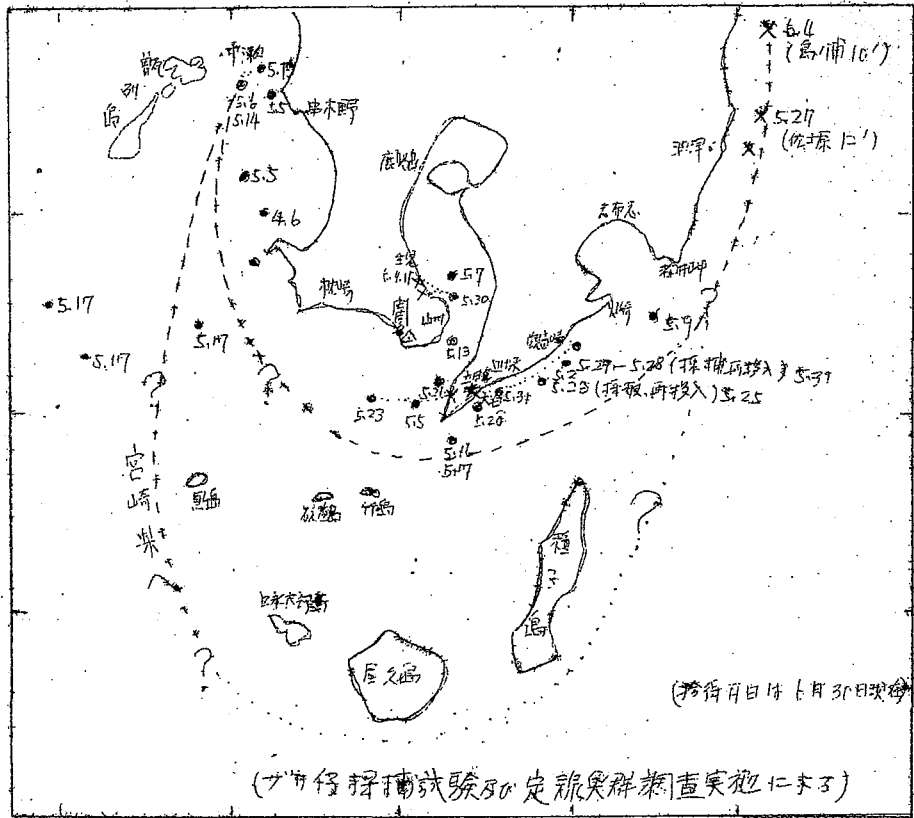








第2図 プリ仔体長組成 (昭和39年)

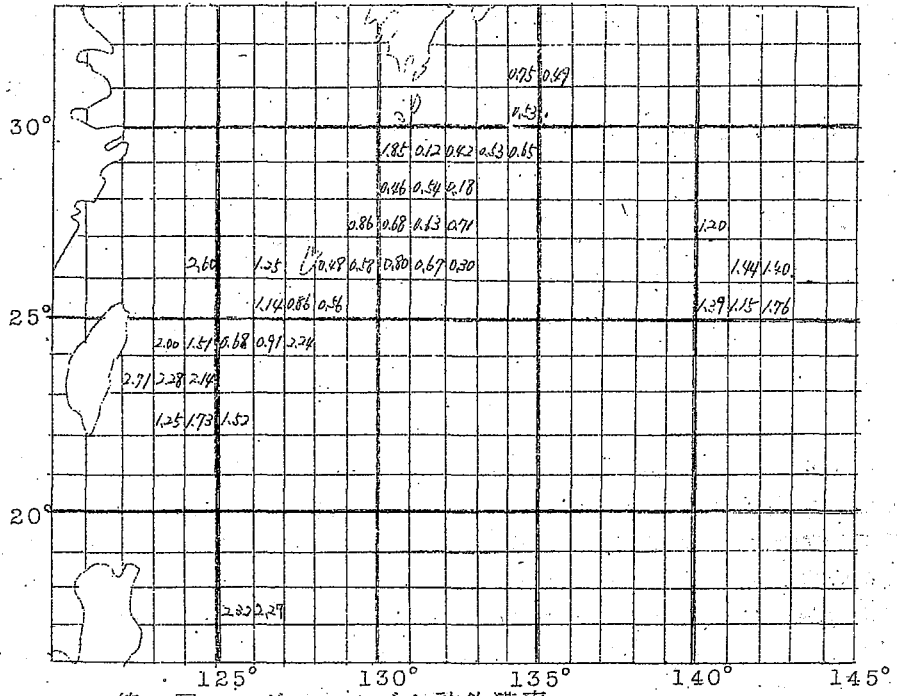


第3図 流水藻採捕放流位置

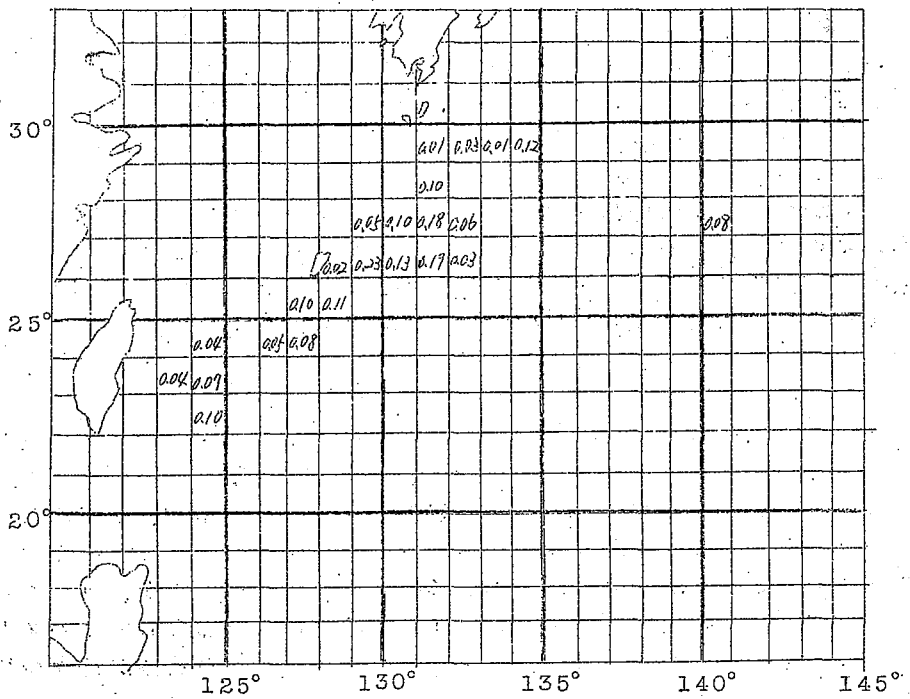
6月のマグロ延縄漁況

漁業部

前月に引続き各船ともクロマグロを目的として操業しているが、今月はクロマグロがやゝ減少しキハダの漁獲がやゝ多くなっている。クロマグロは釣獲率が0.10以上を示す海域は主として沖縄～喜界島東方海域で狭くなっている。一方キハダは17～25N、123～128E附近では好漁で釣獲率も1.0から1.9近くを示している。又、今月は各海区ともバショウカジキの漁獲が目立っている。



第1図 マグロ・カジキ計釣獲率



第2図 クロマグロ釣獲率

一般漁況（6月分）

漁業部

○ 薩南海域の海況（6月上旬）

黒潮本流域は依然として屋久島南岸に接近しているもようで、この附近と大隅海峡附近ではゆるやかな水温の上昇がつづき、5月下旬より1℃それぞれ高く、屋久島で25℃、大隅海峡で24℃となつた。薩摩半島沿岸域では殆んど水温の上昇はみられず黒島近海では22℃、草垣以南域では21℃でそれぞれ2℃低くなつている。このため沿岸域と沖合域との水温差はみられなくなり、かなり広範囲にわたつて22℃台の水温でおゝわれている。

○ 旋網

枕崎根拠の片手巾着は（延入港船は68統1,200トン）6月の前半は宇治群島と西新曾根、下り曾根であつた。主な魚種は宇治では小サバ、小ムロ、西新では大サバ、大ムロ、下りは中サバ。後半になつて湯瀬、西新曾根、下り曾根になり、主に湯瀬では大中サバ、西新は中サバ、中ムロ、下りは中サバ、又梅吉曾根ではアカボ（和名チビキ）を6,000kgの漁獲が目立つた。

串木野根拠の双手網は（延入港船37統300トン）こしき島と宇治群島、こしき島では豆アジ、宇治では中サバであつた。

阿久根根拠の大型巾着船は、宇治群島とこしき島で、前半は小サバ、中小アジ、後半は同漁場で中サバとなつたが、月末にこしき島の長浜沖でブリの好漁があつた。又、中小型の巾着は、牛深、長島、川内沖に常時出漁し、前半はカタクチ、中小羽イワシ、後半になりウルメ、中小羽イワシとなつてかなり好漁した。（入港船は大型28統、160トン、中小型は120統、190トン）

○ カツオ

6月初めは比較的好漁をつゞけていたが中下旬になつて減少傾向になつた。漁場は屋久島、種子島の沿岸域から奄美大島の横当島を結ぶ広い範囲で、黒潮域が特に好漁であつた。魚体は中小判が20%、ガラ80%、魚種の割合はカツオ60~80%、シビ20~40%であつた。

○ マグロ延縄

漁場は沖縄近海の26°~27°N、129°~132°Eと、これより以南の24°~25°N、126°~127°Eがあつて、キハダを1隻90~250本（30~60kg）、クロマグロ20本前後の好漁をつゞけていたが、下旬になつて下火となり、漁場は喜界島近海の26°~29°N、131°~132°Eに移動した。（主に40トン級が集中した）こゝではキハダ40~50本、カジキ30本程度。一方種子島の東方1.5~2.0マイルの漁場には依然としてキハダの好漁がつゞき、1隻10~45本で月の後半になつてバセウの釣獲が目立つてきた。1隻10~20本。

○ 近海釣サバ

上旬は宇治群島（大サバ6、中サバ4）、中旬は草垣、下り曾根（大サバ9、中サバ1）、下旬は草垣、女島、宇治、黒島（大サバ10）で6月中に阿久根入港船は62隻140トン、1隻平均2.2トンと好漁であつた。

○ その他

上こしき島のブリ定置は6月に入つても大群がみられ好漁であつた。又夏季で追込網によるヒラスを260本も獲れ、曳縄船も1日2～3本獲れることは特異とのことである。

種子、屋久島のトビウオは全く不漁で、浮敷網は6月で終了した。今後は追込網だけが続けられる。なお今年は昨年 $\frac{1}{2}$ の量であつたが、値段が高かつたので収入は変わらないとのことであつた。

サワラ曳縄は口ノ島、臥蛇島周辺で活況を呈し、1日20～30本の好漁で10～15隻出漁している。

定 置 観 測 （ 6 月 分 ）

養 殖 部

○ 旬別平均水温・比重（満潮時）

旬	水 温 °C				比 重 ρ_{15}			
	平 均	前旬差	前年同期差	平年差	平 均	前旬差	前年同期差	平年差
上	21.91	+0.20	-1.61	+0.24	27.15	+0.26	+2.22	+2.73
中	22.57	+0.66	-0.93	-0.07	27.01	-0.14	+2.77	+3.51
下	22.56	-0.01	-1.87	-1.32	24.54	-2.47	-0.87	+1.29
月平均	22.28	+2.03	-1.48	-0.43	26.19	-0.01	+1.38	+2.46

※ 平年値は1952～1963（1955、1960欠）の平均。

○ 水 温

21.5～24.4°Cと変動し、中旬までは概して横這い状態を示した。下旬になつてやゝ上昇したが、平年水温に比べ低水温を保つた。即ち、月平均水温は

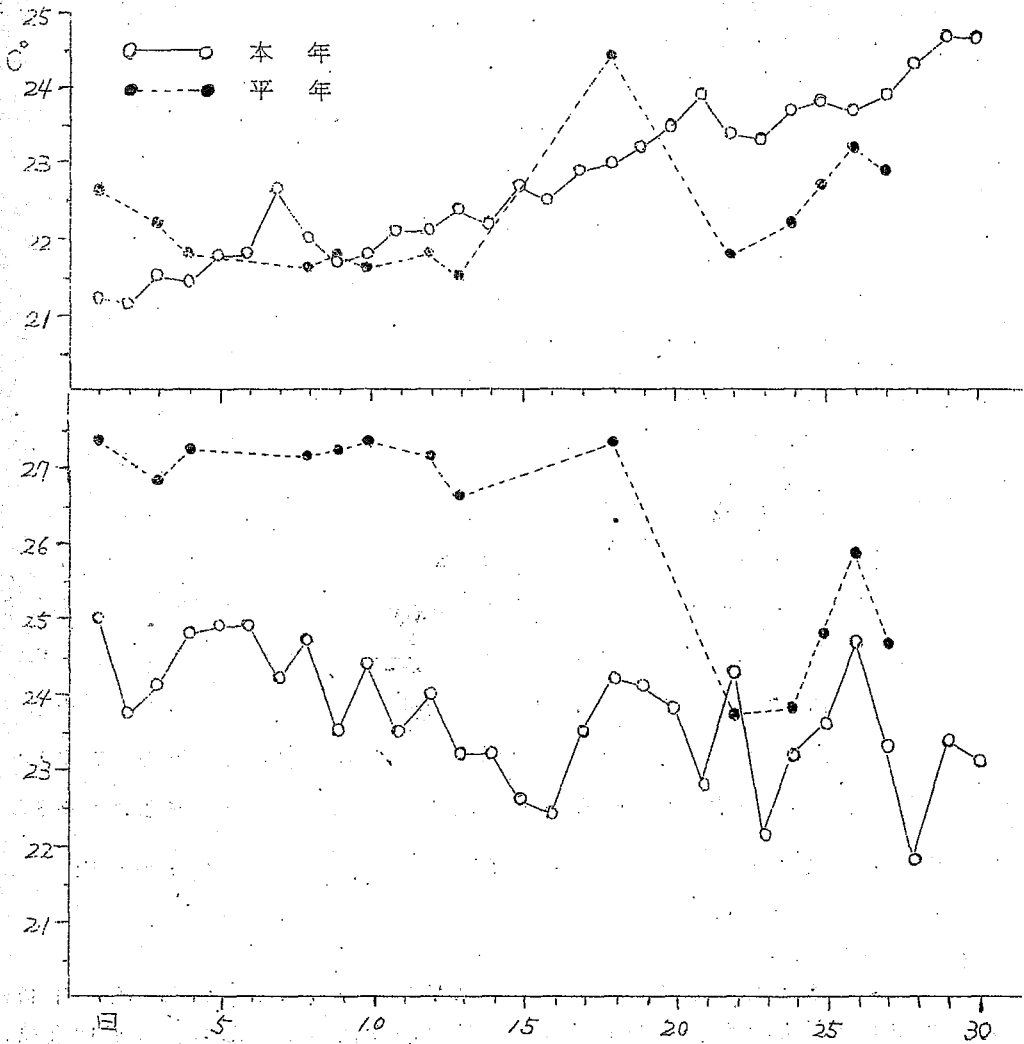
22.3℃で前月より2℃昇温したが、平年水温より0.4℃低く、前年6月平均水温とは1.5℃も低目を示している。

○ 比 重

23.6～27.4と変動し、中旬までは前月同様27前後の高かんが続いたが、下旬になつて25前後に急激に低下した。

月平均比重は26.2で前月と変わらず、平年値とは2.5高目、前年6月平均値とも1.4の高目を示し、今なお高かんが続いている。

6月分 水温・比重の変動



漁 場 観 測 速 報 (5 , 6 月 分)

養 殖 部

[5 月 分]

I 旬別平均水温

観測地 旬別	葛 輪		水 成 川		里	
	最 高	最 低	最 高	最 低	最 高	最 低
上 旬	18.3	18.2	20.5	19.5	22.6	21.3
中 旬	19.6	19.4	21.4	20.8	22.4	23.4
下 旬	20.7	20.2	23.7	23.2	25.0	23.9
月 平 均	19.7	19.3	21.9	21.2	22.6	22.1
前 月 差	+ 3.1	+ 3.3	+ 2.5	+ 2.7	+ 3.4	+ 4.3
前 年 差	+ 1.7	+ 0.7	+ 1.2	+ 1.6	+ 3.4	+ 4.4

- 葛輪の月平均水温は19.3～19.7℃を示し、前月に比較して3.1℃～3.3℃高く、前年同期に比較すると18.0～18.6℃で、1.7～0.7℃高目を示している。
- 水成川の月平均水温は21.2～21.9℃を示し、前月に比較して2.7～2.5℃高く、前年同期に比較すると20.7～19.6℃で1.2～1.6℃と何れも高くなっている。
- 里村の月平均水温は22.6～22.1℃で前月より3.4～4.3℃高くなっている。又、前年同期に比較すると19.2～17.7℃で3.4～4.4℃と非常に高温を示している。
- 西日本海況5月下旬報によると九州一部沿岸水温は平年より1.5℃高くなっており、今後の水温も全体的に平年より高目が続く見込みで、特に沿岸では気象の影響が著しくなるので注意が肝要とのことです。

II 漁 況

1、葛 輪

総漁獲量7,455kgで、これを魚種別にみると、タコが4,655kgで62.4%で大半を占め、次にイツサキが1,855kgで24.8%、これにタイが715kgで9.5%、フグが330kgで3.2%となつている。これは前月と比較すると710kg少なくなつているが、魚種別にはタコが550kg多獲されているのに反し、イツサキ漁が520kg少く、更にフグが610kg少なくなつているのが目立っている。更に前年同期と比較してみると2,090kgも少なくなつている。

月 旬	上			中			下			漁 獲 量 計
	有 漁 日 数	延出漁 船 数	漁獲量	有 漁 日 数	延出漁 船 数	漁獲量	有 漁 日 数	延出漁 船 数	漁獲量	
タ イ	10	200	605	5	40	110				715
タ コ	10	200	1,695	10	130	1,220	11	175	1,740	4,655
イツサキ 他	10	200	755	7	93	500	11	175	600	1,855
フ グ				2	42	230				230
合 計	30	600	3,055	24	305	2,060	22	350	2,340	7,455

2、水 成 川

総漁獲869kgで前月より1,414kg減収となり、これを魚種別にみるとコダイが515kgで59.2%と大半を占め、次に鰺魚が252kgで28.9%、アサヒガニ、ブダイ、アラ等が僅かずつ水揚げされている。更にこれを前月と比較するとカツオ(1,152kg)漁がなくなっているのが目立っている。又更に前年同期と比較するとアジが1,075kg少く、反面コダイが170kg多獲されているのが目立ち、総漁獲量では91.1kgの減収となっている。

月 旬	上			中			下			漁 獲 量 計
	有 漁 日 数	延出漁 船 数	漁獲量	有 漁 日 数	延出漁 船 数	漁獲量	有 漁 日 数	延出漁 船 数	漁獲量	
コダイ	6	18	128	7	32	133	10	36	254	515
鰺魚	3	4	53	4	14	117	5	12	82	252
フカ	1	1	8							8
アサヒガニ	2	3	21							21
ブダイ				1	8	20				20
ンサ				1	8	12				12
イカ							3	3	16	16
アジ							1	1	3	3
アラ							1	1	17	17
サバ							1	1	5	5
計	12	26	210	13	62	282	21	54	377	869

3. 里 村

総漁獲量18,893kgで、前月より28,661kg少なくなっており、その主なものを魚種別にみるとメジナ30,360kg少く、反面キビナゴが2,080kg多獲されているのが目立っている。更に今月分について魚種別の比率をみるとクチミダイが7,151kgで37.8%、次にキビナゴが15.0%、メジナ13.9%の順となつている。

月 旬	上			中			下			漁 獲 量 計
	有 漁 日 数	延出漁 船 数	漁獲量	有 漁 日 数	延出漁 船 数	漁獲量	有 漁 日 数	延出漁 船 数	漁獲量	
水イカ	7	8	528	6	8	640	9	14	670	1,838
イシダイ	5	7	389	2	2	95	8	12	320	804
ブダイ							1	1	350	350
タコ				1	1	110	2	2	130	240
タバメ							1	1	20	20
キビナゴ							5	35	2,850	2,850
赤イカ				2	3	65	1	3	180	245
赤カマス							1	1	2,500	2,500
メジナ	5	8	2,640							2,640
クチミダイ	3	5	101	2	2	30			7,020	7,151
アオブダイ	2	4	255							255
計	22	32	3,913	13	16	940	28	69	14,040	18,893

[6月分]

I 旬別平均水温

観測地 旬 別	葛 輪		水 成 川		里	
	最 高	最 低	最 高	最 低	最 高	最 低
上 旬	21.4	20.9	23.3	22.7	22.6	21.5
中 旬	21.9	21.6	22.9	22.4	22.1	21.4
下 旬	22.6	22.2	23.5	22.9	22.7	21.7
月平均	22.0	21.5	23.2	22.7	22.4	21.5
前月差	+ 2.3	+ 2.3	+ 1.9	+ 1.5	- 0.2	- 0.6
前年差	+ 0.3	+ 0.6	- 1.9	- 1.6		

- 葛輪の月平均水温は22.0～21.5℃を示し、前月に比較して2.31～2.26℃高く、前年同期と比較すると21.7～20.9℃で0.3～0.6℃高くなっている。
- 水成川の月平均水温は23.2～22.7℃を示し、前月より1.85～1.47℃高く、たゞ前年同期と比較してみると1.9～1.6℃低くなり注目される。
- 里村の月平均水温は22.4～21.5℃で前月より0.2～0.6℃低くなり、更に前年同期と比較すると22.7～21.5℃で0.3℃低目を示し目立っているが降雨による影響と考えられる。
- 西日本海況6月下旬報によると、九州南西沿岸では梅雨前線が停滞した影響で水温は前月から殆んど変つてなく、一部に平年より1～1.5℃低目となっているところもあり今後水温も気象の影響で複雑に変るといふことです。

五 漁 況

1、葛 輪

総漁獲量8,710kgで前月より1,355kg多獲されており、これを魚種別にみるとタコが62.8%と大半を占め、次にイツサキが34.2%、タイが3%となつている。これを前月と比較してみるとタコで830kg、イツサキで2,270kg多獲され、フグ漁が今月なくなつている。更に前年同期と比較すると総体で593kg少なくなつており、魚種別にはタコが75.2kg、雑魚が1,380kgと少なくなつており、反面イツサキが1,700kg多獲されたのが目立っている。

月 旬	上			中			下			漁 獲 量 計
	有 漁 日 数	延出漁 船 数	漁 獲 量	有 漁 日 数	延出漁 船 数	漁 獲 量	有 漁 日 数	延出漁 船 数	漁 獲 量	
イツサキ	5	89	480	8	193	1,330	9	161	1,175	2,985
タ コ	10	179	2,590	10	221	1,750	9	161	1,145	5,485
タ イ	4	67	130	5	103	110				240
計	19	335	3,200	23	517	3,190	18	322	2,320	8,710

2、水 成 川

総漁獲750kgで前月より119kg少なくなつており、これを魚種別にみるとユダイが363kgで48.4%、次に瀬魚で226kg、30.1%、フカ類が142kg18.9%となつている。これを前月と比較してみるとユダイが152kgの減収、フカ類では134kg多獲されているのが目立っている。又前年同期と比較すると1,030kgの減収となつており、魚種別にはアジが1,105kg少いのが目立っている。

月 旬	上			中			下			漁 獲 量 計
	有 漁 日 数	延出漁 船 数	漁獲量	有 漁 日 数	延出漁 船 数	漁獲量	有 漁 日 数	延出漁 船 数	漁獲量	
コダイ	6	27	137	6	20	111	5	19	115	363
サバ・アジ	1	1	10							10
イカ	1	1	5							5
瀬 魚	5	14	109	5	7	91	1	1	26	226
フカ他	2	8	47	1	1	19	2	9	76	142
アラ他							1	4	4	4
計	15	51	308	12	28	221	9	33	221	750

3、里 村

総漁獲量 4,452.5 kg で前月より 2,563.2 kg と多獲され、その主なものを魚種別にみるとイサキで 3,093.7 kg の豊漁をみたこと、又カマスで 2,900.0 kg 多獲された反面クチミダイで 6,917 kg 水イカで 1,376 kg の減収、更にキビナゴ漁がなかつたこと等が目立っている。又、今月分について魚種別にみるとイサキが 69.4% と大半を占め、次にカマスで 12.1%、メジナ 4.4% となつている。更に前年同期と比較してみると 60,690 kg の減収となつており魚種別にはキビナゴの 72,550 kg がなかつた反面イサキの豊漁をみたこと等が目立っている。

月 旬	上			中			下			漁 獲 量 計
	有 漁 日 数	延出漁 船 数	漁獲量	有 漁 日 数	延出漁 船 数	漁獲量	有 漁 日 数	延出漁 船 数	漁獲量	
水イカ	6	7	462							462
イシダイ	3	5	120	5	8	235	2	2	60	415
アオブダイ	1	1	230							230
瀬 魚	2	2	110	3	5	360	1	2	30	500
クチミダイ	1	1	30	2	3	153	2	3	51	234
タコ	1	1	90	4	4	540	2	2	220	850
イサキ				2	4	937	3	3	30,000	30,937
メジナ				5	10	1,792	2	3	190	1,982
タ イ				1	2	290				290

エ	ソ			2	2	30	1	1	20	50	
カ	マス			1	1	5,400				5,400	
ネ	リゴ			1	3	100				100	
ヒ	ラス			1	2	40	1	1	700	740	
甲	イカ				1	20				20	
赤	イカ						4	9	310	310	
フ	サ						1	1	15	15	
ウ	ニ						1	モグリ (201)	569	569	
ソ	ノマダ						1	(232)	1,421	1,421	
合	計	14	17	1,042	28	45	9,897	21	27名 (433)	33,586	44,525

港 の え ん ぐ み (2話)

北 山 易 美

内之浦港と志布志港

志布志湾の両袖といった位置に内之浦と志布志港が対峙して両港の海上距離は23kmある。内之浦町は肝付郡高山町に隣接し、両町の中心地は約24km、その間は国見連山の山裾をつら折に曲りくねつたでこぼこ道路が一線あるだけで内之浦町の人は日本一の悪道路といていた。(最近東京大学の宇宙航空研究所いわゆるロケット実験所が設置されたので以前よりはよほどよくなっている)。

今バス便、トラック便があるが往時の交通機関は乗合馬車が1便か2便で殆んどが歩行であつた。郵便物はてい送といて天秤棒の両端に行のうをつゝこんでかついで運んでいた。

従つて生活物資は陸路よりも貨物船を利用して対岸の志布志港や鹿児島港から直接運ばれていたのである。また内之浦町には高校(旧制中学校)がなかつた(今もない。現在はバス便で高山高校に通学する人もある)ので中学校(旧制)に進む人は志布志の県立中学校か或いは遠く鹿児島市内の中学校に入学せねばならなかつた。こゝは漁業が盛んで、古くからブリ定置網漁業で広く知られ、大敷

網の発祥地とまでいわれていたほどであるが、毎日の漁獲物は豊富な森林資源と共にその大部分が志布志港に陸揚げされていた。

このように地理的關係も加わつて古くから両港の間に取引、就学などゝ行われ、双方からの往来が多かつたため必然的に幾組となく縁が結ばれているが、むべなるかなである。

波見港と内之浦港と串間港（宮崎県）

志布志湾の奥ともいうところに波見港がある。港といつても肝付川の河口で入口が狭いし、浅いので2.3トンの船でも満潮時でないと入れない川口港である。大正初期までは港口も港内も深く大型の帆船が岸壁に横付けして陸上には料亭、旅館もあつてちよつとした港町で大阪商船も寄港し湾の中軸をなして内之浦町或は対岸の串間港（宮崎県）との往来が多かつた。

また漁業の面では志布志、内之浦、波見（柏原を含む）串間の漁船が入りあつて操業していた。そのための取引或は日常の往来から四港の間に結婚した組が多く、中には串間から波見に移住している人もある。

今の波見港は前述のとおり港としての機能を使い、さらに戦災で軒並に焼失したため往時のおもかげは残っていない。

枕崎港と山川港

鹿児島県水産業の主位はカツオ漁業でその発祥は坊津港である。枕崎は坊津から伝つて、大正年間に動力船を使用するようになってから枕崎に漁船もカツオ加工工場も急速に増えて県内の主位を占めるようになった。

しかし昭和2年頃までは枕崎には港がなく今の岸壁一帯は砂浜で船が帰つてきても漁獲物は伝馬船に積みかえて陸揚していた。荒天になると漁船は全部山川港に避難し（今も台風襲来ときは山川に避難する）、また山川港に水揚げをして餌の積込みも山川という船が多かつた。そのような状況のため枕崎の加工業者は山川に進出し従業員も枕崎から連れて行つて加工するのも少くなかつた。いふならば当時の山川港には地元船はなく枕崎や県外船の基地であつた。

現在も当時からの加工業者が住みついているがそのようなことから枕崎から嫁に来ている人が多い。なお、それらの人の二世の時代になつた今日でも親の縁故を憂として結ばれる人がある。

山川港と高知県

山川港は天然の良港でカツオ漁業の基地で全国的に有名な港である。昭和初年頃までは地元船という船は2.3隻で入港するカツオ船は前項のとおり殆んど枕崎船と県外船であつた。毎年2月から5月にかけてはそれらの船で港は大賑い、商店界は文字どおり晝入時で物価は平常より2.3割高騰するとまでいわれていた。そのような県外船依存の漁港であつたので町や漁業協同組合では毎年漁期前になると外来船誘致に關係先に出かけるほどであつた。

またこれに呼応したのではないが入港する県外船の船員を対象にした料亭（半

遊かく制)が大小10、数軒できた。中でも東海楼と塩釜楼は最も大きく40名から50名のキレイどころを抱えていた。(これについてはまた項を改めて書く予定)

山川港は今もなおカツオ漁業の基地でありカツオブシの産地で水産業は、町の主産業である。ここでカツオブシ加工が企業的にはじまつたのは大正の初期で土佐の人が山川港に出入するカツオ船に着眼し、山川に進出して工場を設置、女工も土佐から10数名連れて乗りこんだのが嚆矢といわれる。従業員として来たこの女性たちが後に山川の男性と結婚にゴールインしたのが幾組かある。

土佐の加工業者が進出してから山川港の事情が県外に知られ加工業者についで土佐漁船が入港するようになり、その後に静岡船やその他の県外船が入港するようになったが、現在は地元で100トン級の大型船が増えて年間水場10数億に達している。

前述のえんぐみが縁故となつて逆に山川の女性が土佐に嫁いだり、中には土佐の一流の加工業者と結婚している女性もあるというのがそれらの関係で今なお船の賃貸、その他経営上の往来がある。

昭和2年枕崎港ができてからは枕崎市内に加工業者が増えたため枕崎船は殆んど山川港に入らなくなった。しかしその後には宮崎県の小型のカツオ船が入港するようになったので山川港の賑いには変りはない、そしてまたいつからとはなしに宮崎県の人とのえんぐみが結ばれている。

久見崎港と京泊港

久見崎と京泊は川内川口港で港はいつしよといつてよい。川口の両岸に対峙した漁村であるが双方の間には橋がない。往来は殆んど便船である。ここで村の太郎とむかえ(対岸)のお花というえんぐみが昔から行われている。そして長い年月の間にはいろんな逸話も残されていて、中には「親が言わつても久見崎にや嫁かぬ 久見崎や上り風寒うどざる」という唄まで残っている。それらについては拙著さつま漁村風土記に「渡船に乗つた花嫁の遭難」に書いたので省略する。

(鹿児島県漁業公社専務取締役)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆ 奄 美 短 信 ☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

地蔵峠に登つて

私は、時々小学生の娘を連れて古仁屋背後の地蔵峠に登つてみる。山峡いに囁く声と容姿の美しいあかひげ、競鳴するめじろ、姿は美しいが声のまずいるりかけすや又、山鳩の声を聞きつゝ歩を進める。眼を移せば、直下にひらける波静かな大島海峡のなごさから深みに行くにつれて異なる海の色あざやかな美しさは、見なれた景色だがその度に眼をみはる。

まるで箱庭を思わせる中に、童話の鬼が島に似た油井小島、少し離れて杯を伏せたような倭小島がある。目を西に転ずれば、あじさしが営巣すると言う江仁屋離島もまた夢をさそう。

対岸の加計呂麻島は、七月の太陽を受けてあくまでも色青き景觀に、瀬戸内町が、大島海峡を海上国定公園にしようという雄大な計画や、某実業家の「五年後の奄美」と題する構想……。奄美の旅はジェット機で乗り入れて笠利のゴルフ場に遊び、住用、宇検、大和にまたがる自然動物園は、ガラス張りの自動車から見物する。転じて、大島海峡の海底公園はグラスボートで海底の散歩を満喫し、周辺の熱帯果樹に南国の香りを味わう……。

空想に浸りながらしばしの時を過し、臨海道路を走るバスのものうい警笛に我にかえる。山登りして、新鮮な空気に身心を洗い自然の絶景を愛でるのも楽しい。

(N 生)

人事異動！ これはサラリーマンにとつて一大事である。一喜一憂しないのがおかしい。七月異動を鶴首して待つていたが、分場はたつた一人。永田主事の異動のみに終つた。あつけなかつた。皆拍子抜けがした。大きな浪のうねり、潮騒いもやがて平靜に帰つた。そこで頑張ることにした。宮仕えの宿命である。

永田さんは分場から2・3分、目と鼻の瀬戸内土木出張所へ、移転？した形である。旅費も貰いそこねてさつぱり転勤の気持がでないとポヤイていた。送別会というが、いつもの同志気分が抜けなかつた。ビールの本数がいつもと違つていたが。まる4年間、実に克明なそのお仕事振りに深く謝し、これから一層の御健斗を念願して乾杯した。

異動につきものは住宅難である。新旧、入れ替りできれば良い方である。1、2人の定員増？となつたら大変である。この炎天下、汗だくで足がほんとうに棒になるまで探し廻る。家賃が高い、家が狭い、そんなことは言つておられない。それでも見付からない。期日まで赴任もできない。アワレである。この苦難

何とかならぬものか。

6月上旬、大島は急に異常な寒冷で、火鉢をだした家もあつた。悪性の風邪もはやり、小学校は三日間の休校だつた。中頃3、4日だけ梅雨気味。20日頃から本格的な夏に突入した。

連日、太陽も、大地も、炎える熱気。汐風も含んで、不快指数はぐんぐん上昇する。ときに大風の道連れから迷つて、冷然たるスコールがくる。望むところで、涼しい、大助かりである。これらは下界のことで、雲の上の話もある。旧聞になるが、一筆したい。

七月一日、奄美一鹿児島間定期空路、一時間十分で飛来した。大島史上、画期的なできごとである。船で十数時間、海路四百キロ余りを軽くとんだ。時間、空間、文明の歩みを今更考えさせる。飛行機誕生して何十年、私達にとつてはこれまで全く無縁のものであつた。だがもはや航空機は私達の身近なものになり、そして素晴らしい足となつた。それにしても鹿児島まで6,300円の航空費では簡単にいかない。ロクに荷物も積めない。そこで船になる。

さきごろ、鹿児島郵船、専務の話では、将来鹿児島一名瀬間を5時間～8時間で走る新鋭船を考えている、という。丁度、せめて急行列車並の速さだつたら、と考えたりしていた。もつと速くなる可能性も夢ではなくなつた。急行ギリシマで7時間(停車時間を除く)と言えば鹿児島・小倉間389km、運賃(急行券とも)1,000円。鹿児島・名瀬間373km、ほぼ距離は同じ。船賃2等1,860円、13時間～14時間かかる。時間、運賃もも汽車の2倍である。この地域差がなくなることを期待している。

去る5月下旬、某実業家は、今から5年さき鹿児島一大島航路3,500トン～5,000トンの大型船、25ノットで走ることになると観光ビジョンを語つた。一方、鹿児島郵船では3,000トン級建造配船は、現在の各港の整備状況ではむずかしいという。いづれにしても港湾、船の大型化の要請?となつた。これから先きは「ひずみ是正」などとおこがましいことは私たちの分ではない。単純に「船足が早くなる」たゞそのことだけでも私達は喜んでいる。大島郡下でも漸く、航路問題(中味は色々ある)がでた。自分たちの足もとのことである。他人事でない。大島の場合、航路あつての観光(ばかりではない)と思われるが、どうだろうか。

こうして「鹿児島一名瀬間を5時間～8時間」の快速船の話が打ちだされたのも全く珍らしい。どうした風の吹きまわしか。つまり「観光客や、飛行機との対抗」のためであると鹿児島郵船は言つた。飛行機の登場によつて強く刺戟されたことに間違いない。東亜航空が毎日2往復、40人乗り、1.6人乗り、鹿児島・大島全島間を空輸する。飛行機に喰われる打撃は大きい。船会社はさきに「港湾整備の不十分、貨客量不足、資金難」を歎じた。それでも対決するという。なかなか面白い。株主でなくとも両会社の考課状(貸借対照表、損益計算書その他)くわしくは判らないが見たい。他処のフトロコなどゝ気にしているのではない。まんざら赤字でもなかろうに、と思つただけである。

斗争は進歩を促すという。船のことも近く期待がもてることに違いない。やが

て滑走路300mの国産機もできる、然も、実用性、経済性を狙っているというから「大島向き」ではないか。なおさらユカイである。大島の発展は、空、海路から初まる。島の人々の喜びと希望をいくらか申しのべた。これも奄美の声とならないだろうか。

(尾 崎)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆ 各 部 の 動 き ☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

○ 漁 業 部

※ プリ仔採捕

5月下旬まで本県沿岸一帯を探索したが流れ藻、プリ仔を発見出来なかつたので、6月に入つて宮崎県南部海域、油津沖合まで調査したが、体長10～16cmの大型魚の小群で、旋網を使用しても逸散の度合多く、上旬で終漁した。本県の蓄養需要量の確保も出来ない不成績のうちに終つた。

※ 薩南海域の定線魚群調査

前月反応がみられなかつた沖合と種子島海域は今月は濃群が多かつた。全体的にみて魚群量は前月の倍増で、大隅東部(前月の4倍増)、こしき海域(5倍)、西新曾根、湯瀬を含む沖合海域での増加が顕著で逆に湾内(前月の40分の1減)、宇治、草垣(5分の1減)ではそれぞれ減少した。沖合並びにこしき島近海域での反応は表層に多く、表層より10～20mのところに魚群の高さは10～20mが大部分で旋網の対象となつた。

○ 養 殖 部

※ イセエビのフィロゾーマ飼育

6月2日 額娃町水成川で採捕した抱卵エビ5尾を水成川の地先内海に木製蓄養籠(0.5×0.5×0.45m)に1尾毎2籠生け、残り3尾は桜島水族館に陸上輸送、室内のガラス水槽で蓄養中のところ、水成川のは6月13日、16日、桜島水族館では6月10日、18日にそれぞれふ化したので、

水成川のものは前記蓄養籠3個と塩ビ水槽5個を地生け並びに吊り下げ式でフィロゾーラの飼育を続けたところ2回共に4~6日目に斃死した。又、一部実験室に持ち帰つて3ℓガラス水槽で飼育中のものも28日目(3回脱皮)に全部斃死した。

現在、桜島水族館でふ化した6月18日のものを当実験室の3ℓガラス水槽4個で飼育中で7月11日現在91尾が3回の脱皮を終えている。

※ ガザミのふ化幼生飼育

7月8日、出水市福之江から抱卵ガザミ5尾(1尾輸送中斃死)を当実験室の塩ビ製循環水槽で飼育中であつたが、7月12日、13日に2尾がふ化したのでガラス塩ビ各水槽で飼育実験中である。

○ 製造部

※ 鮮度保持現地試験(枕崎)

死後硬直中の鮮魚を薬品処理し、鮮度保持の時間を延長させるため、水揚げ後のアジ、サバにホセンフラスキン、フレッシュヤ-B、A F₂を撒布、本場搬入までの経過を観察、いづれも効果が認められ、特にA F₂が顕著であつた。

※ アジを原料とする珍味製造

現在インスタント式のもの好まれる傾向にあり、指定工場からの要望により焼干タイプあじ製品を試作、併せて容易に普及可能な適正調味配合割合を知るためみりん干を試作、婦人部、加工業者に普及した。

※ 凍結アジによる煉製品製造試験

冷凍アジを原料とした場合、つみれ型製品となり弾力ある製品となり難いのでプロム酸カリ、ミートン添加、足の補強について試験を実施したが良い結果は得られなかつた。

※ 指定工場加工指導

志布志、東串良、笠沙、加世田、指宿の各指定工場に薬品使用、みりん干製法につき加工指導。

○ 調査部

※ 海産魚蓄養試験

4月下旬から牛根試験地において実施中の蓄養試験は、イカ等の頭足類を含めて次第に水族館の様相を呈して来た。

※ 淡水魚異状斃死調査

6月30日朝、宮之城附近の養魚場及び川で多量のアユ、コイ、ウグイの異状斃死が出たので、水産課の依頼によりその水質分析をした結果、検体から除草剤「P.C.P」が抽出された。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆ 分 場 の 動 き ☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

○ 庶務係

※ 7月15日 同日付永田主事 瀬戸内土木出張所庶務主任として異動発令された。

○ 養殖係

※ 瀬相湾に養成中の人工採苗稚貝（昭和38年度の分）の管理の際クロチヨウ稚貝の大量斃死をみた。マベ稚貝の方には殆んど斃死はみられない。6月17日残りのクロチヨウ稚貝のうち130個とマベ稚貝30個を本場へ輸送（脱脂綿に海水を含ませて箱づめにして定期船にて輸送）

※ 7月21日 マベ人工採苗試験始める。

○ 製造係

※ 6月中、下旬の2回請島においてシラヒゲウニ歩留調査をなす。採卵歩留8.2%前後、完熟卵が多く昨年行つた7月上旬の卵状と類似している。

※ 7月初 カツオ魚卵加工試験を実施 仲々意にかなう製品とはなり難い。

○ 漁業係

※ 魚群調査（キビナゴ）

上旬の調査では千之浦、芝深浦地先で小群が現われる。下旬では長崎地先に現われていた。現在、平祐丸は瀬戸内地先、名瀬根拠船は奄郡湾及び名瀬湾、大和浜地先で餌料採捕をなしている。

※ 棒受網漁具仕立指導

宇検村平田でムロ棒受網を計画しているのでそれらの漁具仕立指導をなす。